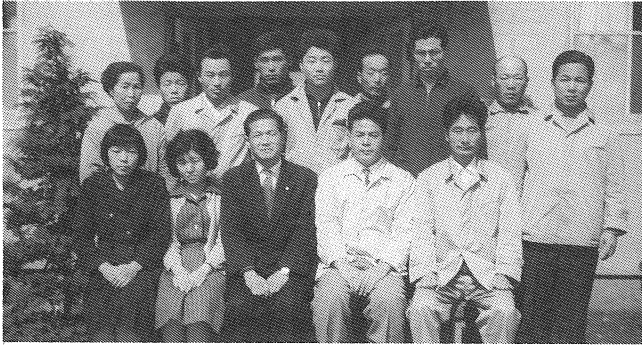


# 宮本健太郎先生を偲んで



宮本先生（前列左から三人目）と愛野支場職員／昭和42年

長崎県総合農林試験場  
愛野馬鈴薯支場長

藤山 俊 計



宮 本先生は昭和25年2月から42年3月まで17年間愛野馬鈴薯支場に勤務され、愛野馬鈴薯支場の創設に当られ、引続いて暖地二期作向き新品種の育成と、栽培技術の確立に尽力されました。私は昭和27年から10年余にわたり指導を受けながら一緒に仕事を続けて参りました。その後、歳月は移り三度目の愛野支場勤務となり、奇しくも昨年9月（昭和62年）には兵庫県市島町で行なわれました先生の葬儀に参列する機会に巡り会いました。近代暖地二期作バレイショ栽培発展のため、ウンゼン、タチバナ、シマバラ、チヂワ等の新品種を育成されると共に、栽培技術の改善のための研究が続けられ、現在の長崎バレイショ面積8,000ヘクタール、100億円の生産をあげるまでに発展する基礎を築かれました。また、暖地二期作地帯全域にもその影響は及んでおり、その功績は農業技術者としては最高の功労と言えるものと思います。一周忌を迎えるに当たり、その頃の足跡をたどりながら、ありし日の先生の姿を偲びたいと思い拙い筆を取りました。

先生の暖地二期作バレイショに対する基本的な考え方は、概ね次のようだったと思います。①良質な種バレイショの生産と確保。②

品種は長崎赤では生産力が低く、農林1号か、それ以上の品質と生産力を備えた新品種の育成が必要である。③秋作の生産性の向上と安定には栽培期間の確保が必要で、従来の9月中旬植付けを、8月下旬～9月上旬に早める。そのために高温時期の植付技術の確立が必要である。④長期間に小産地維持には1年半に1回バレイショを作付けする短期輪作が大切である。⑤そうか病対策として石灰施用量に注意する。

以上の目的を達成するための試験研究が続いていました。昭和20年代後半はバレイショ採種事業の国の検査が開始された頃に当たり、長崎県における原採種圃の設置の重要性に関係者に説かれ、その設置に努力されました。また、その後、雲仙馬鈴薯原原種農場の誘致にも努力され、暖地二期作地帯でも良質の原々種生産が可能な事を立証して、各方面に働きかけておられたことを覚えています。このように試験研究以外にも尽力されていました。その頃は職員の先頭に立って頑張っておられました。実生個体選抜圃に立って、農林1号に優る個体を見つけようと、1個体づついいねいに選抜しておられ、農林1号が憎らしい位だねと話しながら、目の前の優良個体

を選抜することは当然ですが、種いもが小さく今作では充分能力を発揮出来なかった個体には十分配慮して、優秀な個体を見落さないようにと教えられました。

こうした時の先生の顔には優しさが溢れんばかりでした。ウンゼンは実生個体の時は特に優秀で、直ちに選抜されたが、タチバナは第1回目の選抜では選ばれず、次作の第2回目で選抜されたこと、春、秋作で同じ能力を出せない系統がありますよと実例を話して下さいました。このタチバナは昭和30年のいも類新品種査定審査会において、2日にわたる難産の末に農林7号（タチバナ）として生まれることになります。審査会で殆ど質問もなく認定された農林6号（ウンゼン）よりも、後年になるとはるかに面積的に広く栽培された実績をみると、育成に当たった私共の予想とは全く逆の結果となりました。やっと新品種を育成して一息ついている時に、熊沢三郎氏（元九州農業試験場長）から、この品種は味が悪いと言われたと宮本先生から伺いました。

早速、食味に重点を置いた選抜に変更して選抜を続けて、昭和35年に農林11号（シマバラ）を、昭和37年に農林14号（チヂワ）をと、次々に食味が良い品種を育成されました。これらの品種は現在でも暖地バレイショとしては、食味が良い品種とされており、生産力ではウンゼン、タチバナの育成において達成され、食味についてはシマバラ、チヂワによって最高水準に達したといえます。特にチヂワは暖地バレイショの中では最も食味が良い品種と言われ、今でも高く評価されています。

**栽** 培技術の改善に当っては、特に秋作の生産性の向上と安定が大切と考えられ、生

育日数の不足を植付期を早めることによって補うことにし、従来9月10日頃の植付期を10～15日早め、8月下旬～9月上旬に植付ける技術の確立に努力されました。秋作での種いも腐敗の原因解明や、早植による青枯病発生の限界の確認等の試験をされ、早期植付による種いも腐敗防止技術などを確立されました。その頃の試験成果は現在の栽培基準の基礎となっております。昭和20年代の頃は職員全員が一行に並んで鍬で植溝を作り、種いもを並べ、鍬で覆土をしていました。1日10アールを植付けるのがやっとで、1ヘクタール程の試験圃場を植え終るのには、10日程度かかっていました。

先生が覆土をされた後を見ると、まるで定規を当てたようにきちんとした線が残りがきれいな仕上がりで感心させられたものでした。覆土は均一にして下さい、萌芽の揃いに影響しますよと、口ぐせの関西なまりの言葉で指導されました。植付作業の夕方になると、ちょっと休憩させて下さいといわれて、近くの官舎に帰られ、すぐに戻って来て作業に加わられることが再三ありました。いつかその理由をお聞きしましたところ、体がきついで生卵を飲みに帰っているのですと話されたことがありました。戦争中に結核にかかれて数年間も療養された経験をお持ちで、再発にはとても気を配っておられたようでした。農繁期が過ぎると愛用のカメラを肩にかけて、支場周辺の畑を見廻り、農家の方とよく話をしたり、写真を撮ったりしておられる姿をよく見かけました。農家の方を写した時には現像、焼付が終ると必ず届けに行っておられました。そうした機会にもバレイショ作りの話をされていたようです。

農家との交際はとても大切にされ、どんな多忙な時でも農家の人達が支場を訪れると、ニコニコしながら支場長室に招き入れ、長間時にわたって話込んでおられ、仕事の邪魔になりますからと帰りかけると、遠慮しなくてもよいと言われつい長居してしまったことが度々あったと、農家の方より伺ったことがありました。新しい育成系統が出来ると、県内3～4人の篤農家に試作をお願いして、その成績と農家の感触を熱心に聞いておられました。先生の研究に対する熱意と共に農家を愛する

気持には感心させられたものでした。育種という仕事は何年かに一度品種が出来ることによって評価されるものだが、品種が出来るまでの間は栽培試験の成績をもって、農家と接しなければならぬと教育されました。

昭和30年代になると育種試験と併行して、暖地二期作パレイショの休眠、萌芽性の研究に没頭しておられました。貯蔵温度による休眠日数の調節や、温度、日射時間と種いも切断面の腐敗などの問題に精力的に取り組んでおられました。その当時は支場には温度測定装置とでなく、棒状水銀温度計を使って、1時間毎の地温、気温の測定を多数の箇所、24時間連続でやっておられました。宿直の夜には時々お茶とお菓子を出したこともありましたが、先生はとても喜ばれて、有難度う、あなたは早く休んで下さいと言っておられたことを思い出します。こうした研究は数年間続き、成績を取まとめて論文として北大に提出され、農学博士の学位を授与されました。この頃は郷里の御両親が高齢のため、奥さんが兵庫県の市島町に帰っておられることが多

顕彰碑除幕式（昭和43年）



く、永らく単身赴任の状態が続きました。馴れない自炊生活が続きました。

支場には開設当初より昭和40年頃まで正規の事務職員の配置がなく、支場長が出納事務もしておられました。それに水事情が悪く昭和25年から2～3年は、1kmほど離れた井戸まで、水をもらいに行かれるのが日課だったこともありました。天ビン棒の先にバケツ2個をさげて、肩にかついで坂道を往復しておられた姿をよく見かけました。これは私達も同じで宿直者の自炊用の水は自分で運んでいました。農繁期で疲れた時などは防火用水の雨水で炊飯したことも度々でした。こうした農繁期に来客があると、水の汲み置きがなく防火用水の雨水でお茶を出したこともありましたが、後では御存知だったようでした。こうした水不足の解消にも努力され、幾度も工事を繰り返し、徐々に水事情が好転して行きました。自炊生活の頃は、夕方になると庭の掃除をしたり、七輪に鍋をかけてうちわでバタバタとやっておられました。自炊と

研究と大変ですねと申し上げると、自炊生活はわびしいものですよと淋しそうに話されたことがありました。その頃に花壇のふちどりとして、ウイスキーの空ビンが沢山並んでいました。

外出される時は貯金通帳など貴重品を小さなカバンに入れて持ち歩いておられました。家に誰も居ないので不用心でねと話しておりましたが、その大切なカバンをバスの中にお忘れになったこともあったとお聞きしました。

また、ある日バスの中でバス賃を借して下さいと言われたことがありました。財布を忘れてね、あなたと会えて助かりましたと照れ臭そうに言われたことがありました。几帳面で物忘れなどされるとは思ってもいなかったので、宮本先生もこんなことがあるのですかとお聞きすると、もう2～3回やりましたと笑っておられました。表面は無類の堅物で、几帳面な人として通っているその裏側に、こんな一面も持っておられたのかと何かほっとした思いをしたことがありました。仕事をしながら、若い内は無駄使いしないで貯金をしなさいとか、勉強をしなさい。他人はそれとなく見ているものです。勉強の結果はきちんと評価されますなど、若い頃の私は懇切な御指導を頂きました。

――年に2作の植付け、収穫が終ると慰労会をしたり、時には雲仙登山や職員旅行などもしておりましたので、一緒にお酒を飲む機会は数多くありましたが、先生が歌われたことは全く記憶にありません。一回だけ隠し芸を拝見したのは、戸板を背負って杖をついて現れ、ここは何という所ぞとお聞きなっていたことだけでした。気性が強く、妥協を許

さぬ厳しい所が表面に出て、そのような人物評価をされる人が後年には多かったようですが、若い頃の私に示されたあの優しさを思い出すにつけ、優しさと厳しさを併せもった良い先生に巡り会えたことに感謝の念を深くしている次第です。葬儀の折に見せて頂いた病院から見える周囲の写生画は、近くのと松の木を色鉛筆で克明に点と線で書かれてあり、永らくお会いしていなかった私はお変りない先生のお姿を拝見した思いでした。御病気の奥様の看病をしておられ御自分の体の変調に気づきながら病院に行かれるのが遅くなり、診察を受けた時には大腸ガンが進行していたとお聞きしました。そのような時に、どんな思いでこの絵を書かれたのであろうかと思うと、人の命の儚さを痛感させられ涙を禁じ得ませんでした。一緒に参列された愛野町の町長さんと農家代表として参加されたお二人の方の話では、先生が長崎県を退職されてから後も、時折、旅行の時に訪問し交際が続いていて、先生が死去されたことにより精神的に大きな支えを失い、大変落胆された様子が伺えました。愛野支場を去られてから20年余の後までも、長崎県のバレイショ栽培農家からバレイショの神様と尊敬され続けていることは、暖地バレイショを発展させた功績の大きさと共に、その人柄が如何に敬愛されていたかを物語っているように思えます。

一周忌を迎えるに当り先生の御冥福で祈りつつ、10年余にわたって御指導頂いた頃の思い出の幾つかを紹介し、ありし日を偲びつつ筆を置きます。

〔筆者略歴〕藤山俊計 昭和7年生まれ。昭和27年、長崎県立農業講習所を卒業して長崎県農業試験場愛野馬鈴薯試験地に勤務。現職に至る。